



## 研究調査報告

# 戦時下日本の大衆メディア研究 台湾・福岡調査報告

安田 常雄  
(非文字資料研究センター 研究員)

## I 拠点地域を追って

「戦時下日本の大衆メディア研究」班（戦時下メディア班と略称、以下同じ）では、第一年度において、センター所蔵紙芝居 241 点を軸に、植民地も含めた各地域での資料発掘に努め、同時に他の分野の戦時下メディア研究の視点を組み込んで、視点の共有化を進めてきた。具体的には、第一にセンター所蔵紙芝居の解題執筆を進めること、第二に戦時下で紙芝居が上演された地域の現場を調査し、その記録を収集すること、そして第三にはこうした活動を通して、未見の紙芝居作品の発掘に努め、紙芝居アーカイブの現状把握を進めることである。定例の研究会は 2014 年 4 月 30 日、同 8 月 27 日、2015 年 3 月 26 日と計 3 回開催し、ゲストスピーカーを招いて、活発な意見交換を行ってきた。

こうした基本的活動は今年度にも継続されていくが、ここでは昨年度末に実施された台湾・福岡調査を中心に、その活動内容と今後の課題について報告する。

前述のように戦時下紙芝居の研究にとって重要な視点の一つは、それらの作品群がどのような地域を拠点にいかなるメカニズムに従って上演されたかの究明である。この課題は現代史研究の文脈では、同時代の翼賛運動、産業報国運動などの底辺の解明という課題であり、国策紙芝居が銃後の都市や農山漁村などの地域（職場や家庭）にどのような形で浸透し、人びとを内部から戦争に動員したのかという主題である。それは戦時下の大衆意識の構造の問題でもあり、敗戦後の大衆意識との連続と断絶の問題ということもできる。しかし現在のところほとんど研究は存在しない。

こうした地域の実態解明という課題に接近する手がかりの一つが当時刊行されていた雑誌『教育紙芝居』の記事である。戦時下国策紙芝居は、日中戦争開始の翌年、日本教育紙芝居協会という組織が設立され、全国的な組

織活動が展開された。昨年度の第二回研究会において報告された「日本教育紙芝居協会の活動(1938～1942年)」(新垣夢乃、松本和樹)によれば、地域活動にはいくつかの拠点が存在したと思われる。同協会の本部日誌によれば、本部から指導人員が派遣された地域とその頻度は、東京(97)、大阪・京都(27)、秋田(19)、神奈川(18)、福岡(17)などが並び、植民地台湾(21)もかなりの頻度を記録している。そこでは本部からの出張によって、紙芝居の実演や講演会・研究会が行なわれており、研究と実演を両輪とした活動が一般的であった。そうした拠点地域の存在は、その地域に独自の受け皿があったことを意味しており、実演・講演会・研究会などが地元の小学校などを舞台に実施されていることから、受け皿としての教員層の存在が想定される。それではどのような教員層がその担い手であったか、彼らの教育方法や文化運動の特徴はなにか、その接点はどこにあったかなど、今後の調査の課題が浮かび上がってきたのである。

「戦時下メディア」班では、そのなかで連絡の手がかりが判明した台湾と福岡について、まず先行的にその調査を実施することになった。

## II 台湾調査

今回の台湾調査は、2015年2月26日から3月2日にかけて行なわれた。その大きなきっかけになったのは、予備調査によって、戦前台南市にあった「本島人(台湾人)」向けの末廣公学校(現・進学国民小学校)が台湾における紙芝居活動の拠点の一つであり、同校の教師、山口正明が指導的位置にいたことが判明したからである。山口は台湾に紙芝居を移入した人物であり、「台湾では四、五年前迄紙芝居といふものを知らなかった」が、国語教育の一環として導入され、日中戦争後の二、三年の間には全島二百余りの学校で紙芝居が活用されるようになったと書いている(山口正明「台湾より」『教育紙

芝居』1938年9月号)。こうして調査の焦点を旧末廣公学校における植民地時代の資料調査と、当時この公学校に通った子どもたちの聞き書きに絞ることになった。また併せて、現在台湾で紙芝居研究と実践を進めている陳晋卿さんの紹介によって、台中と台南で調査を進めることができた。

まず後者の調査によって台湾の紙芝居12点、紙芝居脚本12本が確認できた。所蔵者は台中在住の収集家、郭双富さんであり、また国立台湾歴史博物館、そして紙芝居脚本については、台湾大学に所蔵されている皇民奉公会製作と思われる脚本である。紙芝居作品については日本国内と同一のものも含まれているが、台湾での刊行によるものには、裏の説明書きが日本語と台湾語の二段併記になっていることが最大の特徴である。たとえば相馬泰三脚色、加太こふじ絵画による「みのる秋」(1943年12月28日、台北市皇民奉公会中央本部発行)のラストシーンには次のような併記が見られ、台湾語では「食糧増産の決意」が加えられている。

「作造さんの家にも、いつか、ちゃんとした神棚が設けられ、朝夕、その前に額づいて皇軍の武運長久を祈り、心から職域奉公を誓ふ親子三人の麗しい姿が見られるやうになりました」(日本語)

「作造さんの厝内。発外久、也安置神棚了。早起時與暗時、全家族、恭々敬々、立在神棚的面頭面、祈願皇軍武運長久、立誓職域奉公 對食糧の増産決意ト更加一層打拼」(台湾語)



写真1 台湾調査スナップ(台南市進学国民小学校にて)  
中列左 王灼明氏、後列右から二人目 張義成氏  
同三人目 李添旺氏

そして現在の進学国民小学校が所蔵する旧末廣公学校関係の資料については、『退職者履歴書』、『昭和拾壹年八月同窓会会員名簿』、『昭和十二年度公文書綴(甲)』、『第

十六回卒業記念写真帳』(1940年3月)などが確認された。現在のところ直接紙芝居に関する記述は確認できていないが、映像教育に関する記述が見られる。こうした文書資料の発掘とともに、同校の校長である李添旺さんの計らいで同校の卒業生の聞き書きを実現できたことが大きな成果であった。それは王灼明、張義成のお二人であり、王さんは1932年、張さんは1933年生まれの子供の同学年、ともに末廣公学校21回生、卒業は1945年3月である。聞き書きの内容は多岐にわたったが、紙芝居に関しては、学校では1年から4年まで、教室で行なわれ、歴史の勉強の一環であったと記憶されている。言葉は日本語で行なわれ、内容は「おとぎ話」などが多かったといわれており、これは前々日に台北で聞き書きした東俊賢(1930年生まれ、同校卒)さんの話とも符合する。また王さんの記憶では、中国人が登場する紙芝居もあったが、その中国人は青龍刀をもって描かれ、「逃げ足の早いシナ兵」「戦争できないシナ兵」などの兵士像が描かれていたという。

また紙芝居は、隣組などでも週に二、三回行なわれており、それは日本語の勉強という側面が強く、日本語の話せる高女卒(台湾第一、第二高等女学校など)の女性が演じ、観客は大人も子どもも集まったという。また「防諜」(スパイ)関係の紙芝居もあり、子どもにやたらと話しかけてくる「怪しい人」がいたら、駐在に報告するようにとの指導があったといわれている。



写真2 台湾での紙芝居風景  
台南市・郭双富氏所蔵

この聞き書きで印象的であったのは、紙芝居はやはり小学校低学年までのものであり、小学校五、六年になると映画に熱中したと王さんは語っている。特に台南の町で育った王さんには、台南という都市そのものが子どもに



とっての劇場であったようだ。子ども十銭の映画館はいうまでもなく、林百貨店の五階には、金魚すくいや五銭の木馬もあり、五銭でマンガもニュースも週替わりで見られる遊びの空間であったからである。シンガポール陥落のときには、子ども一人に一個ずつゴムボールの特配があったという話も聞いた。

また台湾の紙芝居に関わる証言として貴重であったのは、張義成さんの話であった。張さんによれば日中戦争が始まってから、台南にも街頭紙芝居があったという。場所は神社の境内、紙芝居のおじさんは自転車に乗ってやってきたが、その自転車はペダルを踏むと太鼓がなる仕掛けになっていて、またチンドンヤのように太鼓を腹に乗せて、叩いて子どもたちを集めていたと張さんはいう。紙芝居屋さんは何を売っていたかと聞いてみると、ワタ飴、水飴、白飴という答えだった。白飴とは「シンコ細工」のようなものであったようだ。さまざまな種類の飴が売られており、「台湾は砂糖がたくさんあるからね」と張さんは笑った。

私には今回の台湾紙芝居調査のあいだ、いつも頭をかすめていたのは紙芝居「サヨンの鐘」のゆくえであった。当時、「高砂族」とよばれた高山族の一人の少女が「高砂義勇隊」の出征を送るとき、濁流に吞まれて死んだという実話が、長谷川清総督時代のシンボルとして殉死の「愛国美談」となり、記念碑が作られ、歌になり、李香蘭主演で映画化された。もちろん紙芝居も作られ、皇民奉公会はその普及をすすめたのである。今回の調査でも会う人ごとに紙芝居「サヨンの鐘」のことを聞いてみた。しかしみんなの記憶に残り、即座に歌を口ずさむことはできるが、その所在を確かめることはできなかったのである。



写真3 映画「サヨンの鐘」(台湾総督府・満映・松竹共同作品、1943年)の新聞記事  
台南市・郭双富氏所蔵

### Ⅲ 福岡調査

福岡調査は、2015年3月12日から15日にかけて行なわれた。まず12日には九州大学総合研究博物館を訪問した。ここには近年レコード紙芝居のコレクションが収蔵されたという情報が入り、とりあえずその実態の一端を確認するためであった。同博物館の三島美佐子准教授に案内していただいた。レコード紙芝居なるものがあるとは聞いていたが、全身体験するのは初めてであった。

この資料群は宝珠山小劇場に所蔵されていたSPレコード、60,000点(裏表があるので30,000枚)のコレクションであり、現在地下の倉庫にダンボール詰めに入れ、整理中であった。このコレクションは同時代の流行歌・軍歌・童謡・長唄など多様な内容を含んでいるが、そのなかに数点のレコード紙芝居が混在していた。当日、視聴したレコード紙芝居は、「軍神広瀬中佐」(REGAL)、「軍神荒木大尉」(REGAL)、「愛馬の戦死」(コアレコード)、「軍神古賀連隊長」(太陽)、「日の丸太郎」(TEICHIKU)、「ラッキョウと兵隊」(KING RECORD)の6点であった。形式はほぼ片面3分程度で、リーガル・オーケストラ、キング管弦楽団などの楽団が参加し、語りは島廻家勝丸、田村家吉丸などの芸人や青空コドモ会、日本児童音楽劇協会などの団体が参加している。全体として放送劇スタイルで、ラップ・機関銃・列車音・馬のいななきなどの「擬音」が組み合わせられ、「露営の歌」や「敵は幾万ありとて」などの軍歌が臨場感を高めている。こうした複製技術の画一性は同一内容のまま、広域化されていき、それ故に動員効果が期待されていたと思われるが、そこでは紙芝居の本来もつ原初的メディアとしての具体性や偶然性(たとえばアドリブの自由)は喪失されていた。「効果」は果たしてどうであったのか。

次いで福岡調査は、3月13日から15日にかけて、福岡県朝倉市周辺で行なわれた。かつてこの町は駅を降りると、正面に大刀洗の陸軍飛行第四連隊の営門が見える「軍都」であり、甘木には多くの将校が住み、にぎわいを見せていた地域であった。1919(大正8)年朝倉郡三輪村、馬田(まだ)村、三井(みい)郡大刀洗村にまたがる45万坪に、長さ500m、幅200mの滑走路二本をもつ飛行場が完成され、周辺にはさまざまな軍事施設が作られ、総面積115万坪に及ぶ「東洋一」の巨大な航空基地となっていた(『筑前町立大刀洗平和記念館・常設展示案内』増補版、2013年)。

現在の段階では「軍都」と紙芝居の関係について、詳細は不明であるが、この地域に国策紙芝居の一つの拠点である三輪小学校が存在していたのである。当時の資料には次のように記されている。「三輪支部 福岡県朝倉郡三輪小学校は福岡県下の模範校、青年団は全国的な模範になってゐる。県では紙芝居を禁止しようかと云はれてみた位だったが、見事に活用して児童教育の武器として積極的に乗り出し、教育界の注目の的となつてゐる」(「支部結成」『教育紙芝居』第1巻第3号、1938年11月号)。また同小学校の紙芝居教師として平島三悟、石井幸夫、真鍋七郎、真鍋延寿、藤井辰実、橋津ウテナ、倉地善六の名前が記されていた。

3月13日、私たちは大刀洗平和記念館が所蔵する紙芝居4点の調査・撮影を行なった。一点は10枚の断片でタイトルなども不明であるが、三点は以下の通りである。「軍人援護日誌 七日間」(1942年7月15日、日本紙芝居協会、編輯者:佐木秋夫)、「英霊に応ふ」(1943年9月25日、軍人援護画劇、大日本画劇株式会社製作)、「彌作貯水池」(1943年9月25日、恩賜財団軍人援護会・軍事保護院、上里吉曉作、清水幸太郎画)。また翌14日には、福岡県立甘木歴史資料館において、紙芝居19点の調査・撮影を行なった。ここでは詳細は略すが、現在非文字資料研究センター所蔵分との重複もあったが、新たな作品も所蔵されていた。

それではこの地域の拠点と思われる三輪小学校関係の実態はどのようなものであったのだろうか。「三輪小学校」関係の資料が残存しているのは、筑前町のめくばー図書館ではないかという僅かな情報を頼りに、同図書館を訪ねることになった。ところが同図書館主任の藤井美希枝さんの好意によって、三輪小学校の紙芝居教師の中心にいたと思われる「平島三悟」という人物の輪郭がわかる資料を見つけることができたのである。それによると平島三悟は、1912(大正元)年生まれ、31年に朝倉中学校を卒業、33年福岡師範学校を卒業すると、三輪小学校、筑紫国民学校、甘木国民学校で教えていたこと、特に綴り方教師として熱心であり、彼は三輪小学校では『野情』と題する「学級週報」(ガリ版)を発行

していたこと、また戦争末期の44年6月には通信兵として招集され、1945年5月25日沖繩戦で戦死したことなどが判明した。彼は当時の教え子などに慕われていたようで、1993(平成4)年には『野情』(No.1、1940年5月7日～No.14、1941年2月)を採録した同名の記念誌が刊行されていたのである。ここから浮かび上がってくるのは、戦時下紙芝居と「綴り方運動」との関係であろう。この地域では周辺の市町村史のなかにも「綴り方運動」展開の記述をみることができる(たとえば『浮羽町史』下巻、1988年)。



写真4 福岡県朝倉郡三輪小学校五年混合組「学級週報・野情」  
福岡県朝倉郡筑前町・めくばー図書館所蔵

こうした地域の実態を考えると重要なのは、もう一つの拠点としての寺院の存在である。3月15日、私たちが半ば偶然訪ねた、浮羽町光福寺住職(真宗大谷派)の佐藤智水さんやその母親である佐藤照子(1933年生まれ、1941年に小学校2年生)さんからは、1932年頃からお寺の日曜学校で紙芝居をやっていたという話を聞いた。作品としては「麦と兵隊」や「一粒の米」、また「くもの糸」のような法話の紙芝居を記憶しているという。戦時下の日本教育紙芝居協会浮羽郡連盟支部の記録では、故人である佐藤憲雄さんの名前が記録されており、その実態の究明が望まれる。

「戦時下メディア」班では今回の地域の調査、紙芝居の現物調査を一つのステップに国策紙芝居の実態を深めていきたいと思っている。